

米山梅吉記念館 館報

2010
(平成22年)

秋

Vol. 16



昭和6年、米山梅吉は、郷里長泉に図書館を寄贈しました。米山の寄附による蔵書約1000冊の図書館は「米山文庫」と名付けられました。満州事変勃発という年に米山はこの文庫を作りました。「当時、不況の波に人々が嘆いていたとき、この事業は氏の愛郷の精神の賜物であると共に、人々にとって明るい話題であった」とその由来にも記されています。「言葉は人の心を潤す魔法の水」と言った人がいます。米山も悪化の一途を辿る社会状況の中、せめて心の栄養だけは枯渇させまい。と思ったのではないでどうか。

平成22年4月29日、長泉町、長泉RCそして米山梅吉記念館の三者が手を結び、この米山文庫を復活しました。旧記念館を改装した建物は、国産の杉板張り。素足で歩ける館内は、本が一日で見渡せる棚に囲まれています。子どもの絵本を中心に、約4500冊の本を収蔵し、広く一般に開放します。今後、蔵書を増やし、本の入替も行う予定です。

米山が文庫を作ったから約80年。この文庫復活事業には、地元の子どもたちの心を養い、子どもたちと、昔子どもだったすべての人が、共に笑ったり考えたり、時には涙する場所になってほしい、という私達の思いがこめられています。自分の雅号に「子供たちに幸あれ」という思いで「子幸」とも使った米山。この米山文庫が、時の流れを経て米山の思いを受け継ぎ、時間や世代を越えた地域の交流拠点になることを願ってやみません。



財団法人 米山梅吉記念館



館報第16号発刊に際して

理事長 渡邊脩助

今年の梅雨は、日本各地に豪雨災害をもたらしました。そしてまた梅雨開けには、猛暑日の連続で、多くの熱中症が発症しました。

世界中でもロシアの異常な暑さ、中国の洪水、南米の寒波と異常気象が起っています。熱帯化する日本も地球温暖化の影響でしょうか。豪雨災害にあわれた地区の皆様には、心からお見舞い申し上げます。

全国のロータリアンの皆様、お変わりありませんか。米山記念館です。皆様のご理解、ご協力にお礼と感謝を申し上げます。

日本のロータリー会員減少は、未だ止めがかりませんが、ご来館のロータリアンの数やクラブ数や移動例会は増加しております。有難いことだと思っております。

各クラブでは、R.I.会長 Ray Klinginsmith のテーマ「地域を育み、大陸をつなぐ Building Communities, Bridging Continents」のもとで、新年度計画をたて、実践されておることと思います。R.I.もさまざまな新しい「変化の風 Wind of Change」のプログラムが計画されています。新R.I.長期計画、新ロータリー・コーディネーター(R.C.)、ロータリー財団の未来の夢計画や、2010年規定審議会などがあります。これはあくまでも世界の各クラブの活性化を目指すため、クラブのサポートと強化が基本です。日本のロータリアンはもう一度、ロータリーの原点に戻り、ロータリーの基本理念とロータリー哲学を踏まえて、今日的な奉仕の実践を一步一步確実に行なうことが、強く求められています。

当記念館は、昨年創立40周年を迎ましたが、その記念事業の一つとして旧館を改修し、図書館として「米山文庫」を復活させようと計画しました。平成22年4月29日の春の例祭時に文庫のオープンを行いました。皆様にも文庫をご覧頂き、「米山文庫」の心を感じて頂ければと思います。

米山文庫は、米山翁が昭和6年に青少年育成の

ために、郷里の長泉小学校に寄付した図書館です。赤瓦屋根の鉄筋造りで約15坪でしたが、当時としては洋風のモダンな建物でした。蔵書約1000冊も翁の寄付によるもので、学童だけでなく、村民にも利用された文庫でした。残念ながら、この文庫は昭和59年に校舎の耐震工事に伴い解体消滅しました。

地元の長泉R.C.は、予てより文庫の復活を計画しており、記念館創立40周年、長泉R.C.創立25周年、長泉町制施行50年という記念が重なったこともあります。三者が共同でこの事業を推進し、完成することができました。この文庫復活によって生ずる人と地域との交流に大きな意義があり、公益法人を目指す記念館にとっても有意義な事業でした。文庫の評判は大変良く、親子で来館したり、特に土・日曜日には満員になる盛況であります。

公益法人への移行は、井口常務が中心となって定款の改訂、評議員の選考等が着々と進められています。8月の理事会では、準備状況の報告が出来る見込みであります。

米山記念館は、財団法人として第2620地区でお世話させて頂いておりますが、日本の全てのロータリアンのものだと思っております。そんな思いの中で、全国の100円募金運動、賛助会制度を始め、地区資金、神奈川2地区、米山記念奨学会等からのご援助を受けて運営しております。しかし、会員数の減少、不況の波を受け、米山記念奨学会への寄付金も前年を下回る状況が続いております。当記念館は奨学会とは別の法人ですが、ご多聞にもれず厳しい状況が続いております。おかげさまで何とか精一杯の運営ですが、念願の企画展や展示室の整備、充実等の事業への予算が回らず苦しんでおります。何卒これまで以上のご理解、ご協力をお願い致します。

全国のロータリアン、米山奨学生、地域の皆様のご来館を心より、お待ちしております。

春季例祭

■日時 2010年4月29日(木) (昭和の日)

14:00

■会場 米山梅吉記念館 ホール

- 例祭式典

- 創立40周年記念事業

米山文庫開設事業報告

- 感謝状贈呈

- 米山文庫開館式

- 記念特別講演

演題 深良用水(箱根用水)について

講師 福野市深良地区郷土資料館運営委員

小林秀年氏

- 懇親会



ご来賓の方々



改修工事担当のダイアリビングに感謝状贈呈



新しくなった米山文庫の前で



米山文庫の内部

記念講演



深良用水(箱根用水) について

(1) 開削の発端

深良用水の開発は、深良村の名主大庭家5代当主、源之丞により草案されたものです。寛文3年(1663)2月13日江戸浅草・友野与右衛門重之、相模坂間・宮崎市兵衛、江戸日本橋・松村淨真の3名で箱根権現に立願状を提出したことに始まります。この立願状に名を連ねている3名のうち、友野を除く2名は事業には参加せず、元締め(出資者)にはなっていません。

深良用水の工事は、現代風にいえば当時の村長が工場説教を行ったようなものです。その証拠に、寛文6年7月18日に、発企人大庭源之丞へ箱根湖水掘抜に付き、友野与右衛門、長浜半兵衛、尾崎嘉右衛門、浅井治郎兵衛の4名から差入証文が出され、その恩謝として、村々より元締め達に納入された年貢米上り年々上米5石納入します、と差入証文に残されています。これから、大庭源之丞が発案し、開削技術者と資本家に話をもちかけたことがわかります。

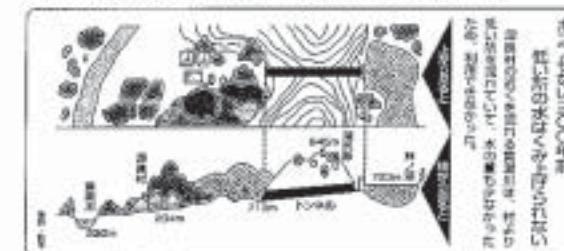
大庭と元締め達がどこで出会ったかは分かりませんが、立願状提出の時期から見て、寛文年間の初めには合っていただろうことが推察されます。この工事は天領(幕府の直轄領で裾野市では室沢村等)と小田原藩(茶畑村、深良村等)に跨るため、小田原藩だけの許可申請では済まず、幕府の許可が必要でした。その担当は勘定奉行で、芦ノ湖が箱根権現の所領であったため寺社奉行の承認も必要でした。ですから、目的達成の折りには箱根権現に対して年200石を御神領として奉納することが記されています。

(2) 工事の出願から隧道貫通まで

寛文6年4月13日、小田原藩の御厨代官に用水開発請負手形を提出、同日付けで許可を受けます。次いで5月17日、幕府領沼津代官所へ用水開発請負手形を出願し、28日に認可。8月2日より深良側熊洞より工事に着工。11月より芦ノ湖側から工事に着工し昼夜兼行で行われたということです。これは、茶畑村の名主柏木甚右衛門の覚書帳に記されています。

工事の主たる金元は、江戸豊岸島(本舟町)の浅井治郎兵衛です。開発手形に記されていない元締に須崎源右衛門、橋本山友、尼崎加右衛門、伏見仁左右衛門らがいますが、彼らは少しずつ資金を出した元締めで、山に居て色々指図をしたことが市史編纂時の資料で明らかになりました。長浜半兵衛も金主で隧道工事の現場監督であったことがわかり、元締めは当初の4名から7名に増えています。

隧道の大きさは一間四方と決められ、隧道内の地質は箱根外輪山に属する輝石安山岩が主でした。石質が硬く工事はなかなかかかどらず、当初の目論見の一年半から二年を大幅に超過した3年6ヶ月を経て、寛文10年2月25日に貫通、4月25日通水に成功しました。隧道の長さは1280.3mを有し、当時としては世界に誇る大工事でした。隧道内には5~10mおきに照明用灯火をおいた跡がみられます。



(3) 開発契約と費用負担

元締めたちと小田原藩、幕府との契約は自費で工事を行い、8000石(小田原藩7000石、沼津代官領1000石)の新田を元締めが開き、開発された新田は小田原藩で7年、幕府領で15年の無年貢とすることにしました。小田原藩は堀を田にした分の用水料を認めましたが、幕府領は新規開発だけしか認めませんでした。

工事費については、宝永5年(1708)御宿村の下湯山家所蔵の湯山安右衛門日記に「資金9700両を要した」と記されています。佐藤隆著『箱根用水史』によると、その資金調達は元締め達の出資金が3700両、幕府賃付金6000両でした。浅井、尼崎、長浜、友野、須崎の5名の元締めが併借し、4000両は7年間の上穀米で返済し、2000両は江戸で返すことになりました。

(4) プロによる仕事

長浜半兵衛は金主であると共に、隧道工事の現場監督でもありました。箱根外輪山の内部は硬質な火山岩で成り立っており、岩場経験のない農民の手では掘れないことがわかりました。そこで金庫職人が

岩場にあたり、農民は運搬作業や雑仕事をやりました。鉱夫についての記録は残っていませんが、彼らは隧道工事に他所から稼ぎに入り込み、完成後は新たな仕事を求めて移動していました。武田信玄が御殿場市の深沢城を攻めた折、金山衆を動員して城崩しを行ったことはよく知られています。

(5) 年貢米横領事件

富沢村の名主渡辺勘兵衛は、沼津代官領の年貢米を、江戸浅草へ回送する牢頭(農民から選抜された回送の責任者)を務めていました。ところが延宝4年(1676)の年貢米に御撰出米(不良米)が生じ、この分を再納したところ、再度不良米が生じてしまいました。そこで勘兵衛は元締め衆の橋本山友にその売却を依頼しました。山友はその売却金46両と他の年貢米64両も預かり、この総額110両を元締め3人が着服して使い込んでいます。

これに気が付いた勘兵衛は元禄2年(1689)、橋本山友、浅井佐次右衛門、伝三郎の3名を勘定奉行に訴えます。この状態から元締めたちの経済的逼迫が表面化し、これをきっかけに用水の管理は幕府に接収されます。

ここに19年に渡る元締めたちの用水管理は終わり、代わって幕府は、水配人として沼津代官領から御宿村名主平次郎、小田原領から茶畑名主甚右衛門を任命し管理に当たらせます。



毎年開催される芦ノ湖水神社の祭典

その後、芦ノ湖の水が稻の枯死を救うという認識と、与右衛門達への報恩感謝の気運から、生得元年(1711)元締め達が居住していたといわれる長泉町惣ヶ原に元締めの供養塔が建立され、明治34年(1901)4月友野与右衛門、長浜半兵衛、尼崎嘉右衛門、浅井次郎兵衛、大庭源之丞の5柱で笠を祀り、芦ノ湖水神社が建立されます。毎年8月1日に祭礼が行われています。寛文3年、立願状を提出してから300年

にあたる昭和39年11月、300年祭を挙行しました。その際、与右衛門の子孫である友野宏弥氏から、与右衛門愛用の刀が奉納されました。

(6) 用水の完成

隧道が完成すると、寛文11年(1671)に小田原藩普請奉行により、この水を黄瀬川に落とすための深良新川の工事が始まります。動員総数のべ3229名、御厨領の農民を動員して行われました。各所に堀川や堰が築かれ通水に成功しましたが、川の作りは現在の川幅より狭く、石積もなく、土手幅も狭かつたため、度々豪雨による河川決壊の記録が残っています。元禄16年(1703)には大地震により隧道、新川土手破損の記録もあります。

その後、改修普請は元締めに代わり国役になり、1781年から1846年まで5回の国役普請が行われています。大正4年の逆川事件をきっかけに、深良村他6ヶ村により水利組合が結成されて現在に至っています。

(7) 現在も生きる用水の恩恵

現在、深良用水の耕作面積は昭和30年代を境に減少していますが、米作農家にとって用水はなくてはならないものです。箱根西湖は火山灰質で覆われ、深良川上流では各谷より湧き出る水が深良川に流れ込み、多少の水流は確認できますが、下流に下る間に殆ど地下にしみこんでしまい、大雨でも降らない限りなかなか水流は見られません。

この用水は、三カ所の発電に利用されています。下流の第三発電所横の深良川の水流が殆どないこと、各人家より排出される雑排水の処理に役立っていること等を考えると、なくてはならない用水です。明治12年決定の受益面積は裾野、長泉、清水町、御殿場市の2市2町で、湖面積より狭くなっています。

米山さんの墓碑にもなっている「いさかいもなき漫々の青田かな」の俳句にうたわれている「いさかい」も水争いのことと聞いています。田畠を守る人々にとって水は何より大切なものでありました。米山さんの時代になって水争いもなくなり、どこの田畠にも水が行き渡るようになりました。長泉には当時の苦労が偲ばれる古文書が多数残されています。毎年8月には虫干し会も開かれています。また、10月には隧道観察も行っています。百聞は一見に如かず、先人のたゆまない苦労と努力の跡を、自分の目で確かめるチャンスですので、機会があれば見に行ってください。

若き日の米山梅吉が金融界に残した偉業

「合名会社三井銀行歐米出張員報告書」(明治34年出版)
…銀行業務近代化黎明期の先進歐米銀行の「解体新書」…



谷 内 宏 文 (東京日本橋RCプロバスクラブ)
元三井信託銀行代表取締役副社長

はじめに

平成18年の年の頃も押し迫ったころ、当館の井口賢明常務理事から嬉しい知らせが私に届きました。それは、私が予てから探していた表題の図書が、文京区西片町の杉原古書店の在庫リストのなかにあると言う知らせでした。この本のことについては、拙著「点描米山梅吉 日本のロータリークラブと信託業の創始者(平成17年8月発行 新風舎文庫)」のなかでも取り上げていたことを井口さんは覚えていて下さって、知られてくれたのでした。

早速、新年開店早々の同書店に駆け込み、同書を含め数冊の古書とあわせて10数万円の散財で入手しました。

明治9年に日本最初の私立銀行として「私設会社三井銀行」の名で開業した同行は、明治15年の「日本銀行条例公布」を受けて「日本銀行」が開業したことにより、江戸期の「三井組」時代から営業の基軸であった「官金取扱」を失うこととなり、抜本的な経営近代化改革をせまられることとなりました。この改革を本格的に実行した中心人物は、明治24年に同行の経営のトップに就任した「中上川彦次郎」と言う人ですが、中上川はこの改革に当たり、先進歐米銀行に学ぶ必要を痛感し、当時入行間もない3名の俊英を調査員としてこれに当たらせることとしました。その彼等が明治31年9月から翌年11月の1年2か月の間出張調査を行ったその結果を報告書として出版した書籍が、本稿が紹介しようとする「合名会社三井銀行歐米出張員報告書」です。そうして、この調査員の3名の中の一人こそが若き日の米山さんで、他の二人は後に日銀總裁・大蔵大臣になった池田成彬であり、さらにはこの出張後若くして亡くなつた

丹 幸馬

(以下原則として、いざれも歴史上の人として敬称を略すか「さん」付けとする。)

本書の存在について筆者は予ねてから米山さんの事



後列 丹 幸馬
前列右 米山梅吉
前列左 池田成彬

績を調べる過程でいくつかの資料から承知していましたが、長い間直接手に取って読む機会に恵まれませんでした。

早速一読しての感想は、少し大袈裟に言うと「これはまさに、わが国の銀行業界にとって、かの医学界における杉田玄白・前野良沢等による「解体新書」に匹敵する偉業の成果」との強い感銘を受けました。このことを是非米山ファンの皆さんに知ってもらいたいと思います。

一、本書「出張員報告書」の体裁

本書の書籍としての形体は、チョコレート色クロス張りで、背文字として金文字で『合名会社三井銀行出張員報告書』と印されています。サイズは判版15行・35字詰め。「米国之部」711頁と「英國之部」308頁、合計1,019頁の大冊で、明治34年の洋書形式の書籍としては堂々たる品格を備えています。発行日は明治34年4月19日、編輯兼発行者鈴木鶴吉、印刷所東京印刷株式会社となっています。

開巻して最初に「凡例」3頁がありますが、凡例という言葉はこう言ふ形では最近はあまり使われなくなっているので、広辞苑で確かめると「書物のはじめに掲げる、その書物の編集方針や利用のしかたなどに関する箇条書」となっています。本書は生きしくこの用語どおりに使われています。

この凡例の次に13頁に及ぶ「目次」があり、本文「米国之部」の扉、そして本文となっています。

近時の通常の感覚では「出張員報告書」とあるからには、その調査出張を行なった主体とその意図・目的さらには出張調査の行程等が当然記録されているものと期待されるのですが、本書にはそれ等の事項は一切書かれていません。

発行主体の三井銀行の名前が出てくるのは、本の題名にだけあり、また執筆者3名の名前も米国之部と英國之部のそれぞれの第1頁に「出張員」として一度

づつ示されているだけで、この3名が三井銀行の中でどういう役職員であるのかの記録は全く無く、本書をどの様に分担執筆したのかも書かれていません。

これを見ると本書は専ら、調査対象とした銀行等の業務内容を実務的に調査記録し、参考手引書として役立てるだけを編集方針としたものとうかがうことが出来ます。

二、あの時期に何故「出張調査」が行われたのか

ここで、本書の具体的な紹介に入る前に、本出張調査が何故あの時期に三井銀行によって行われたのか、少し立ち入って見ておこうと思います。

これについて、出張員だった米山さんご自身は、この調査出張から約30年後に出版した随想集「銀行行余録」の「13章 取引台を顧みて」のなかで次のように述べています。

当時我邦銀行業務の権威は尚國立銀行創始の制度に則れる様にして、世運の進歩変遷に従ひ銀行の内外大に改良を要すべきものあるを首肯せしめたり、之より先き日本銀行に在りても同一の目的を以て井上準之助、土方久蔵の二氏を海外に出張せしめ、三井銀行に在りては則ち此の三人の其選に當るなり。特に三井銀行は恰も本店の新築中なりしを以て、行内諸般の設備と共に業務取扱上の改善を計るに汲汲たりしかば、其調査事項の命令書は五十数項目に亘りて実際を専らとし、取引台の取付方、客室の模様、行内の設備より重役以下支配人の位置、行内の分課職掌、各係員の概数及び執務の仕方、預金取引、貸付手続、諸帳簿の事、其勘定法、諸収入支払及び伝票より信用調査機関、人事の末に至るまで網羅して、各銀行同盟團結の仕組、倉庫との関係にも及び、當時早已有名の信託会社業務の点に迄も涉れり。

ここで「國立銀行創始」と言っているのは、明治5年の「國立銀行条例發布」に伴う翌年の「第一國立銀行設立」のことであり、また「之より先日本銀行に在りても」と言うのは、三井のこの三人より丁度1年先行して行われた、明治30年10月の井上・土方の英國・ベルギー等への出張留学のことです。

さらに、「三井銀行は恰も本店の新築中なりしを以て」とは、明治29年10月に着工し35年11月に完成した日本橋駿河町(現在の三越百貨店本店の地)の、わが国最初の精鋼式鉄骨建築の本店(これは大正12年の関東大震災で損壊し、現在の日本橋室町の三井本館への建築に至る)建築のことです。

それはそれとして、またこの時期のわが国経済は、明治20年代前半の新橋・神戸間また上野・青森間の鐵道開通や長崎造船所・三池炭坑・富岡製糸場の官業の民間への払い下げに象徴される「日本の産業革命期」と呼ばれる発展途上にあり、産業全般が急速に近代化

を迫っていた時でした。

そうして、特に三井銀行には前述の「官金取扱返上」に伴う改革が課題となっていました。

ここでこれに係わる、三井の歴史的事情を整理して書くと次のようになります。

三井家が京都と江戸に呉服店越後屋を開業したのは、江戸開府70年目の延宝元年(1673年)ですが、江戸店は天和3年(1683年)駿河町に移転し、それまで一般的だった「益暮れ払いの掛売り」商法に対し「現金安売掛込なし」の看板を掲げて「正札現金売り」で爆發的に江戸庶民の顧客化に成功しました。それと同時に独立の両替店を開いたのですが、当初呉服店の補助機關であったこの両替業は、元禄4年(1691年)に幕府の「大阪御金蔵銀御為替御用」を務めてからは三井にとって呉服業と肩を並べる主要な事業となりました。

この為替の仕組みを少し説明しますと、幕府は大阪で溜まつた金銀を江戸に現金輸送する代わりに、大阪の三井両替店に渡し、三井は江戸での売り上げで得た金銀を幕府に納め、京都・大阪での商品の仕入れのための必要現金の輸送を避けることが出来ると言う、いわゆる「かわし・為替」のやり方です。これは、大阪での現金受け入れから江戸での幕府へ上納までの期間(60日乃至150日)無利息で運用出来ること、さらには、三井の京都・大阪への送金が多額であったことから、極めて利のある商売でした。

そうして、明治維新後も、三井は他に先駆けて朝廷方に加担したことにより、新政府の「金穀出納所会計事務局御為替方」に任命され「為替方三井組」としてこれは引き継がれていました。

この様な歴史的経過のなかで日本銀行の誕生によりこの官金取扱返上が行われることは、三井にとって歴史的とも言える損失を伴うこととなり、このとき、この事態に対処するため三井の財政顧問の立場にあった井上謙の懇意により三井入りしたのが、前述の中上川彦次郎でした。

中上川は中津藩(現在の大分県)の藩士の子で、母親が福澤諭吉の姉にあたるため若いときから福澤に育てられた様な経歴をたどります。慶應義塾で学んだ後に明治7年20歳で福澤に費用を出してもらってロンドンに3年間留学しましたが、この留学中にたまたま海外財政経済調査のため渡欧して来た井上謙の知遇を得ます。そうして、帰国後外務省井上謙の下で秘書官や公信局長を務め、福澤が興した「時事新報」の社長を経て、山陽鉄道(神戸・下関間)の社長となったりなどしていたとき、井上に請われて三井に入り、明治34年に48歳で亡くなるまでの10年間この経営改革に当たつたのでした。

このとき中上川が把握した三井銀行の状況は次の様

なものでした。

預金残高2,000万円のうち500万円が官金とそれに付随する預金で、これは当然流出するものと考えられる。かたや、貸出金残高1,800万円のうち600万円が不良貸し出しなつていて、その主因は特権的に取り扱ってきた官金をめぐって政府高官などに行っていいた情実質であるが、この整理回収が無くては預金流出とのバランスは不可能である。従って、この改革のためには、それまでの金貸し会社的体質から近代的商業銀行に脱皮しなければならない。そのため、番頭・手代と言う様な人事の仕組みを変えて新しい教育を受けた人材を登用し、経営組織の合理化を図らなければならぬ。官に代わる新しく勃興してきた工業に目を向けて「商業と金融の三井」から工業を拿下に持つ企業に転ずる。そのためにも、あらためて先進欧米銀行の経営に範を仰ぐ必要がある。と言ふものでした。

そうして、この方針の下で中上川によって採用され改革に当たった人達を、その後の主な業績を付して列挙すると次のようにになります。

藤山 雷太	芝浦製作所(後の東芝)・王子製紙に 関与、大日本精糖を再建し「東洋の 砂糖王」と呼ばれる。東京商工会議 所会頭など。
小林 一三	阪急電鉄・宝塚グループの創始者。 商工大臣。
武藤 山治	鏡潤紡績社長、カネボウ・グループ 中興の祖。衆議院議員。
和田 豊治	鏡潤紡績から富士紡績社長。
藤原銀次郎	王子製紙社長「製紙王」と呼ばれる。 藤原工業大学(現慶應義塾大学工学部) を創立。商工大臣。
鈴木梅四郎	王子製紙専務と自身の闘病経験から 低底医療、医療国営論の先駆者となる。 衆議院議員。
日比 翁助	越後屋呂服店を三越百貨店にし、近 代的デパートメントストアを創始。 長く三井銀行の実質的最高経営者。
池田 成彬	三井合名会社筆頭理事。日銀総裁、 大蔵省商工大臣。
米山 梅吉	三井信託株式会社を創設、初代信託 協会会長。貴族院議員。

これ等の人達による経営改革の結果、その後に「三井グループ」と呼ばれるようになった。王子製紙・東芝・カネボウ等の系列化が実現し、藤山以下日比までの人達がその経営を担い、池田・米山のこの欧米調査出張員だった二人が三井銀行に残って、長くその経営に当たると言つことになったのです。(上記の人達は米

山さんを除いて全て慶應義塾を卒業した中上川の後輩です)

ここで、池田・米山・丹の三人の出張発令までの履歴を簡単に紹介しておきましょう。

先ず、慶應3年(1867年)7月に米沢藩士の子として生まれた池田成彬が満31歳で最年長でした。池田さんは明治21年に慶應義塾を卒業後に渡米し、明治28年ハーバード大学を卒業して帰国し福澤諭吉の主宰する「時事新報」の記者となりましたが、「月給が安い」と福澤に逆らって3週間ほどで退社しました。そうして、同年12月に三井銀行に入行し、出張発令時の役職は既に足利支店支配人でしたから、中上川彦次郎の人材登用は相当なものであったと言えます。

次いで、米山さんですが、明治21年渡米しオハイオ州のウェスレアン大学(メソジスト監督教会派の神学校)を中心に苦学生として学び、池田さんと同じ明治28年に帰国しました。その後1年ほど日本鉄道会社(上野・青森間)に就職したのですが、縁あって三井銀行に転じ、出張発令時の役職は、入行10か月にして神戸支店次席でした。

従って、池田さんに較べ米山さんは歳にして7か月、入行して1年10ヶ月の後輩ということになります。この差は二人の間に生涯ついて回りましたが、明治42年に三井銀行が合名会社から株式会社になったとき、二人は同時に常務取締役(オーナー社長三井高保に次ぐ役職)になり、その後14年間ほど三井銀行の経営を担つたことはご承知のとおりです。

三番目の、若くして亡くなった丹 幸馬という人の履歴については、今ではほとんど分つていません。米山さんより少し若かったようで、一説には三井銀行入行前に英語の教師をしていましたと云われているので、やはり外國留学経験者か慶應義塾の卒業者だった可能性はあります。

三、出張調査の旅程と訪問先および本書の「文体」

本書には前述の通りに、この出張調査がどのような旅程で行われたかについて一切書かれていませんが、幸いなことに「米山梅吉先生伝記刊行会」による『米山梅吉伝』のなかに貴重な記録が残されています。

この『米山梅吉伝』は、昭和32年の青山学院初等部創立20周年の事業として、その前身の「青山学院綾岡小学校」を私財をもって寄付創立した米山さんを記念して刊行されたものです。そして、この伝記部分は米山さんの同郷で青山学院の後輩に当たる英文学者で作家の「佐々木邦」(昭和初期に少年だった人には「苦心の学友」や「恩弟賢兄」等のユーモア少年小説家として親しい名前である)の執筆によりますが、その執筆資料として、生前米山さんと親しかった多くの人が追憶文を寄せられていて、それも収録してあります。

そのなかで元三井信託株式会社監査役だった若林祐治郎氏が、この歐米出張調査のことを約6頁に渡り寄稿しているので、以下にそれを参照してこの調査員の旅程を要約して見ます。

…出張調査員の旅程…

明治31年9月13日 横浜港を出港
9月30日 ホノルルを経由しサンフランシスコに到着
10月1日 大陸横断鉄道にて出発
10月5日 シカゴに到着
10月8日 ニューヨークに到着
10月12日 池田・丹両名パーク・ナショナル銀行で
調査開始
米山 フィラデルフィア視察
10月20日 米山ニューヨークに戻りマーカンタイル・
ナショナル銀行調査開始
12月30日 3名上記調査終了
年末・年始を過ごした後フィラデルフィアとボストン等の数行および手形交換所と倉庫など視察
明治32年1月28日 ニューヨークからロンドンへ向
かう

2月5日ロンドンに到着
以後5月末まで滞在してナショナル・プロビンシャル・バンク・オブ・イングランド・ロンドン・アンド・ウェストミンスター銀行、バース銀行、イングランド銀行、手形交換所や倉庫業などで調査・実習・見学特に、バース銀行ロンドン・ストリート・オフィス支配人のシャンド氏の厚遇を受ける

5月29日 大陸に移動し各地の銀行を調査
7月30日 ロンドンに戻りその後スコットランドを
視察
10月17日 帰国途につく
11月27日 帰京
11月29日 米山・丹両名調査部係勤務発令
明治33年3月22日 米山本店営業部勤
5月1日 米山大阪支店支店長代理勤務発令
この、帰国直後の米山・丹への勤務部署発令の状況から見て、本書は明治32年12月から翌年3月中旬までの約3か月半の間に、主にこの両名によって原稿作成されたものと推測されます。

さらに、ロンドンにおいて「シャンド氏の厚遇を受ける」とされていますが、これは当時ロンドンの銀行は、自らの銀行員以外の人が店内に立ち入ることを禁じていたが、シャンドの斡旋によりバース銀行の行員から銀行外で何回かのレクチャーを受けたことを示しています。

この便宜を提供してくれたシャンド(Alexander Allan Shand 1844~1930)という人は、明治のわが国の銀行創成期に最も貢献のあった人です。バース銀行ロンドン支店副支配人の地位から、幕末にパンギング・

コーポレーション・オブ・ロンドン・インヂア・アンド・チャイナの横浜支店支配人として来日し、明治5年11月の国立銀行条例制定に伴い、国立銀行の経営指導のための外国人教師として政府に雇い入れられました。明治11年3月に帰国するまでの間、大蔵省官僚や国立銀行行員に対して銀行簿記や業務運営について指導し、それを著した「銀行簿記精法」と「銀行大意」はその後長く金融界で教科書として使われましたから、おそらくこの3人の調査員も渡航前にそれで勉強していただろうと思われます。

この「行員以外店内立入り禁止」のことを、本書の「英國之部」の冒頭の「倫敦銀行取調報告緒言」で書いている部分を、原文の雰囲気を知つてもらう一助として次に写してみましょう。

倫敦銀行取調報告緒言

派遣員カ米国ニ於ケル視察ヲシテ英國ニ入り先ツ困難ヲ感シタルハ其取調ノ方法ニ在リキ凡ソ銀行力取引先ノ秘密ヲ守ルヲ以テ要義トスルハ何レニ於テモ同ナレトモ而カモ米国ニ在テハ幸ニシテ「ナショナル、パーク」及「ナショナル、マーカンタイル」等親切ナル銀行ノ在ルアリテ其内部ニ入り實地ニ就テ以テ其希望ヲ達スルノ途ヲ得タルニ英國ニ在テハタダニロニ之ヲ要義トスルノミナラス各銀行ノ廣告等ニハ常ニ必ス右ノ秘密ヲ保ツ旨ヲ記載シ之ヲ以テ頭大切ナル事トシ派遣員カ尚ホ新約克滞在中ノ三四箇月間ニ於テ倫敦三井物産会社支配人ハ予メ種々ノ手段ヲ以テ派遣員ヲシテ倫敦銀行ノ業務ヲ實習スルヲ得サシメンカタメニ尽力到ラサル所ナカリシモ前記ノ次第ナルヲ以テ能迄拒絶セラレ且ツ派遣員ノ倫敦ニ着シタル當時ハ彼ノバース銀行ニ於ケル有名ナル六萬ポンドノ粉失事件カ大詫判ナリ居タル際トテ殊更困難ヲ認メシメタリ蓋シ英米両國ノ銀行ハ其制度ニ於テ異ナル所ノモノアルモ其ノ營業ノ實際ニ於テハ殆ト相同シキモノアリ只タ社會萬般ノ上ニ反映セル両国民ノ特性カ銀行業務ノ上ニモ各異彩ヲ添ルニ過キシテ前例ノ如キモ亦タ摧シテ其取扱振ヲ察スルニ足ルヘキモノタリ然レトモ銀行ノ内部ニ入ルヲ許サレサル一事ノ外ニハユル便宜ヲ享ケ諸銀行ニ出入シテ説明及材料ヲ得以テ其取調ヲ完了セリ

以上の様に本書は「片板名漢語混じり、句読点・濁音無し、書き綴ぎ様式」とでも言う文体で綴られているため、現代文に慣れていない我々には可なり読みづらい文章です。

文学の世界で、いわゆる「言文一致運動」の先駆とされる二葉亭四迷の「浮雲」が発表されたのが明治20年、山田美妙の「夏木立」が発表されたのが明治21年と言うことを考え合わせ、その約10年後に、漢学の素

そのうえに英文に精通したこの時代の俊英たちが纏めた「事務文書」として見ると、本書はその面での歴史的資料としても大変貴重なものと言えるでしょう。

四、報告内容の概要

本書の具体的な内容紹介に入るまえの前置きが長くなりすぎましたが、何分にも1,000頁以上の銀行の事務と言う特殊な分野の調査報告ですから、本稿では全体の構成と、筆者が特に感じたいくつかの点についてだけ書いてみることします。

全体が「米国之部」711頁と「英國之部」308頁であることは前記のとおりです。先ずこの米国之部では、当時のニューヨークの主要銀行だったナショナル・パーク銀行とマーカンタイル・ナショナル銀行を最初に調査し報告しています。前者を池田・丹の両氏が後者を米山さんが担当したことは、旅程の記録のとおりです。

その内容は、両行の歴史とニューヨークにおける同業間での地位にはじまり、取り扱っている営業全てを「係」毎に分けて詳細にレポートしています。特にその中では、パーク銀行の分としい180種類とマーカンタイル銀行の分として100種類の伝票・帳簿・証券・契約書等の雰囲や事務室のレイアウト図が収録されていて、極めて実証的な調査内容が示されていることに驚かされます。筆者の銀行での実務経験から見て「正に“解体新書”だ」と感じさせられたのは、その中身の濃さとレベルの高さによります。

この2行の調査には出張当初の約2か月半を当てていて、先進銀行の事務全般を徹底的に解明しようと意気込みが強く感じられます。

次いで英國之部では、この米国での2行の全般調査をふまえて、出張の事前に三井銀行内で各部署から募った、約60項目程の質問事項の調査を行っていますが、それ等をおおまかにまとめると次のようなことになります。

- (1) 銀行の建物・事務室のレイアウトと役職員の勤務状況
- (2) 当座預金と手形・小切手の普及とその事務処理状況
- (3) 貸付と為替の実務の状況
- (4) 役職員の待遇と服務の状況

これ等は当時の日本の銀行が業務の近代化・効率化のために是非とも知りたいと思っていた事項ばかりでした。

この他、米国でも「業」として始まったばかりの「信託業(Trust Business)」についても、詳細な報告をしています。その内容は紙幅の制限から本稿でくわしくは書けませんが、米国の業界でもまだ一部の人達にだけしか知られていなかったことを体系的にまとめたものとして、日本にあっては勿論のこと世界的にも、おそらく初めてのものと評価できるような内容のものです。

日本の信託業が法律的に整備されたのは、この報告書の出版から21年後の大正11年の「信託法」と「信託業法」の公布によりますが、その法制にもこの報告書は大きな影響を与えていたと筆者は感じています。

そのような「報告書」でしたから、出版されて三井銀行内に配られるや「非売品」にもかかわらず他の銀行を中心に多くの関係窓から分与の希望が殺到したと言われています。

おわりに

さて、最後に本書を読んでの筆者の感ずるところを2点にまとめて、本稿を終えることとします。

その一つは、この3名の調査員が実務処理の面でも秀でた力量の人達であることを痛感させられたことです。

先にも記したように、この出張時に池田さんは入行2年10か月程、米山さんは1年弱で、丹さんもおそらく米山さんと同じ程度の履歴と思われます。しかもこの人達はオフィサーとしてクラークの仕事である細かい事務にどこまで精通していたか疑問ですが、この報告書はそのことを全く感じさせません。パークとマーカンタイル両行の個別の事務フローとその処理方法・使用する帳簿等の報告は極めて詳細丁寧でそのまま業務別マニュアルとして使用に耐え得る内容で、他行から分与希望が殺到したことでも充分に納得ができます。これ等を短期間にヒヤリングしてまとめたことは驚異的なことと言って過言ではありません。

そして二つ目は、この3名に後進者の腕するところとか卑下した姿勢が全く感じられないことです。むしろ随所に派遣員としてのプライドをもって先方と接したことがあががわれます。実は本稿で「調査」という言葉を使ったところはほとんどが本書では「取調」となっているのです。例えば「調査対象銀行」としたところは本書では「取調銀行」です。明治30年頃の語感と現在のそれとが異なるということはあると思いますが、この言葉の使い方だけを見ても、相当な誇りの高さを感じさせられます。これは何故なのでしょう。

彼らの学歴は直接に交渉した「キャッシャー」とか「セクレタリー」と称される支配人に較べて全く遜色のないものであったこともあります。この時すでに三井銀行自体の経営内容や機構・事務がかなり高いレベルに達していたことが背景にあると思われるのです。

筆者の手元に明治32年1月1日発行の「三井銀行営業案内」なる、全218頁のカラー表紙の冊子がありますが、その内容は現在でも立派に通用する「デスクローラー・ジャーナル」で、これを見ると、当時すでに銀行として世界に通じる態をなしていたことが解ります。

また池田さん米山さんとともに、留学から帰国後の第一志望がジャーナリストだったこともこの誇り高さの底にあるものなのかもしれません。

新理事からのご挨拶

植田新太郎(東京RC)



本年より、前任者の諸戸精幸さんの後を引き継ぐことになりました。

東京ロータリークラブに入会を許されたのが1974年ですから、1937年生まれの私にとって人生のほぼ半分をロータリーアンとして過ごしてきたことになります。

ロータリー入会前には8年ほど東京青年会議所に所属して、リーダーとしての訓練や社会奉仕、国際奉仕などに取り組んできましたので、所謂四大奉仕の精神に馴染むのにも余り時間が掛りませんでした。その結果、入会間もない時期からローターアクト委員長を皮切りに、クラブ奉仕、社会奉仕、国際奉仕の委員長や幹事、地区の米山委員会、地区副幹事、など数多くの奉仕の機会を与えられ2002~2003年度にはクラブ会長を務めさせて頂きました。この年のR.I.会長はビチャイ・ラタクリル氏で、氏の暖かいお人柄と「慈愛の種を播きましょう」のテーマが思い出に残る1年となりました。

入会直後のロータリーで印象に残ったのは、所謂四つのテストが極めて分かりやすくロータリー精神を表現していると感じたことと、ロータリー創立者の米山梅吉氏の功績を記念して発足した米山奨学会の存在でした。この印象は30余年を経た今日でも変わらず、ロータリーの会員資格はこの四つのテストを体現していることに尽きると思っています。

又、米山奨学会事業の素晴らしい点は、他の奨学会制度と異なり単に経済的な援助に留まらず、カウンセラーアシスタントによって留学生を精神的にバックアップすることによって、彼らが親日家となって帰国することにより、母国と日本との架け橋となっていることです。そして米山奨学会が推進している奨学生のホームカミング制度が本格化することによって、奨学生と受け入れクラブとの継続的な交流が成果を高めるでしょう。

近年、奨学生の母国である台湾、韓国、中国に続々と米山学友会が設立され、更に今年の2月にはR.I.第2750地区に国内初となる米山学友会の「東京米山友愛ロータリークラブ」が創立されるなど、この活動の波及効果の大きさを物語っています。

特に体制維持の為に集会を厳しく禁じている中国で、米山学友会が認められたことは注目すべきことです。これが突破口となって、近い将来にロータリークラブが中国に誕生するなら単にクラブの拡大という意味に留まらず、四つのテストを通じての職業倫理の向上が進むなら、グローバルな経済活動の推進にも大いに役立つことにも繋がると思います。

さて、今年は米山梅吉記念館開設40周年の節目を迎え、旧館を改修して米山文庫が誕生しました。去る4月29日にはその開設セレモニーが挙行され、私も東京ロータリークラブを代表し、テープカットに参加させて頂きました。奇しくも今年創立25周年を迎えた長泉ロータリークラブは、記念事業として文庫整備に100万円を寄贈されたとのことです。

又、昭和6年には米山梅吉氏が地元小学校に1千冊の図書を寄贈されたことから、長泉町も新しい米



山文庫に助成金を出し、地元の子供達にも開放することになりました。現在保有する図書は4500冊とのこと、今後更に多くのクラブからの支援を得て、目標とする1万冊の蔵書が実現することを期待したいと思います。

秋季例祭のご案内

- 日 時 平成22年9月18日(土) 14時開会
- 場 所 米山梅吉記念館ホール
- 講 演 「ロータリーの暁」 田中毅氏(尼崎西RC)
- アトラクション ジャズピアノ 菅野邦彦氏

ポール・ハリスと神戸と「四つの宝」

加藤 隆久（神戸RC）



ポール・ハリスが神戸へ来る事になったのは、昭和10年(1935)のことです。太平洋ロータリークラブの第五回大会が、マニラで開催され、国際ロータリーのヒル会長(Robert E. Lee Hill)とロータリー創始者ポール・ハリス夫妻もこれに出席しました。そのあと、日本に立ち寄る予定で、神戸クラブに於て2月23日の創立記念家族会で盛大に歓迎会を催すことにしていました。ところが荒天で船が遅れて予定が変更となり、2月10日の新大阪ホテルに於ける京阪神三クラブ合同の午餐会に迎える事になりました。その時の出席者は150名ということになりました。見るからに精悍な風貌のヒル会長と対照的に温厚なポール・ハリスの様相は会員に大きな感銘を与えたといいます。そしてその夜一行は神戸港から乗船し、上海経由でマニラに向いました。その船内では、神戸ロータリークラブの川崎芳熊氏の令嬢敏子さんと小曾根貞松氏(当写真を寄贈した神戸クラブ会員小曾根有氏の祖父)の令孫涼子さんから花束と日傘をヒル夫人とハリス夫人に贈り大へん喜ばれました。(写真①)この写真が神戸ロータリークラブの四つの宝の一つです。



写真① 後列右から4人目がポール・ハリス

さて、今、神戸ロータリークラブに、この外三つの宝として大切に保存されているものの一つに、ポール・ハリスの襟章があります。このポール・ハリスの襟章が何故神戸クラブにあるのかについても記しておきましょう。

日本のロータリー復活に会長として署名した元国際ロータリー会長のアンガス・ミッケル(Angus Mitchell)氏が来日したことがあります。それは昭和25年4月、京都で開催された復活第1回60地区年次大会にポール・ハリスの襟章会長代理として出席することになったのであります。その前に神戸を訪れたのであります。ミッケル会長は、折から開催していました神戸博覧会を見学のち、御影の嘉納純邸で歓迎晩餐会に臨まれたのであります。この席で手厚い歓迎を受け、記念に嘉納氏より繪巻を贈られました。一方ミッケル氏はお返しに、自分が着けていたロータリーの襟章をはずして嘉納氏と交換し、「これはポール・ハリスと私が交換したものです」と述べました。かくしてロータリーの創始者ポール・ハリスが胸に着けていた襟章が嘉納の胸に着けられたのであります。そして、のちに嘉納はこれを神戸クラブに寄贈いたしました。これがその後「四つの宝」の一となり、歴代の会長が公式の会合の時には、これを胸に着けることになったのであります。

因にあの二つの宝とは、ポール・ハリスの生家の繪と国際ロータリークラブの認証状であります。

前者は昭和36年(1961)ロータリークラブの世界大会が東京で開催されたとき、当時の神戸ロータリークラブの末正久左衛門会長が、アメリカのバーモンド州ウォーリングフォード地区のガバナーから贈られたもので、以後末正氏から神戸ロータリークラブに寄贈されたものであります。(写真③)

後者は昭和24年(1949)4月13日付の国際ロータリーミッケル会長とラブジョイ事務総長が署名した認証状ですが、承認番号は、1925年4月15日に認



写真② ポール・ハリスの生家の繪

証を受けたときの1986番を引継いたものであります。神戸ロータリークラブとして、1924年8月13日に我が國で三番目に、神戸市のオリエンタルホテルを例会場として創立され、翌1925年4月15日に国際ロータリーのヒル会長、ベリー事務総長から承認番号1986番として認証を受けました。しかしながらこの1925年4月15日付の認証状は、昭和20年(1945)6月、空襲に遭い、オリエンタルホテルとともに焼失してしまいました。したがって今残っているのは終戦後



写真④ 国際ロータリーの認証状

三島大社と米山梅吉

三島大社の社務は、神主矢田部氏のもと、社家・社人とその他の奉仕者によって維持されていました。日比谷氏はこの社家に該当します。社家頭大村氏、日比谷氏、植松氏、大村氏、伊達氏の五家が、固定された番頭と称される、有力社家でした。

梅吉の実母和田(日比谷)うたは、この日比谷氏の血をひいています。うたは、江戸詰めの高取藩士、和田竹造に嫁ぎます。しかし、明治5年(1872)に竹造が亡くなります。そこで和田家は、うたの実家を横って三島に引っ越ししてきます。

の昭和24年(1949)4月13日付の国際ロータリーミッケル会長、同ラブジョイ事務総長が署名された認証状ですが、承認番号は、1925年4月15日に認証を受けたときの1986番を引き継いでいます。

この「四つの宝」は、代々の会長が就任する時、大切に受け継がれてきたのであります。

しかし私が神戸ロータリークラブの会長在任中の平成7年1月17日未明に発生したあの未曾有の阪神淡路大震災でオリエンタルホテルが大被害を受け閉鎖となり、同ホテルの九階にあった神戸RCの事務局も崩壊してしまったのであります。困ったことに「四つの宝」も部屋の中に閉じ込められてしまいました。しかしこの「四つの宝」を身の危険も顧みず撤出したのが当時の中尾襄幹事と三人の女性事務局員でした。これによって私は会長としての面目を施し、「四つの宝」を引継ぎ保存することが出来たのであります。かくして第2680地区のガバナーを務め、今、米山記念奨学会の理事を務めることの出来たのもこの「四つの宝」を受け継いたからであります。

尚、本稿を執筆するきっかけとなりましたのは、去る6月23日米山梅吉翁ゆかりの三島大社に参拝し、矢田部正巳宮司と面談ののち、米山梅吉記念館へ立寄り、館内の展示物を事務局員の御丁重な案内を受けたことがあります。館内の素晴らしい米山翁やポール・ハリスゆかりの品々を拝見しながら、つい神戸ロータリーとポール・ハリスの関係を話しましたところ、是非「米山梅吉記念館 館報」にそのいきさつを執筆してほしいとの御依頼を受けたからであります。

記念館退出後、梅吉翁の墓に詣でました。大雨の最中でしたが「いさかひもなき漫々の青田かな」の名句を反芻しつつ、偉大なる米山梅吉翁を讃えお偲び申し上げました。



三島大社が、梅吉と静岡を結びつけた、といえるかもしれません。

講談「日本のロータリーの創始者米山梅吉翁一代記」 DVD発刊にあたって

大橋 誠 (さいたま新都心RC)

我々さいたま新都心ロータリークラブは、1990年1月22日に埼玉県与野市の地に国際ロータリー第2770地区「与野西ロータリークラブ」として37名のチャーターメンバーで創立総会を開催。そして、同年4月24日に認証状伝達式を行いました。以来、活発な活動を続け、今年度クラブ創立20周年を迎えることができました。

2003年には、さいたま市の誕生と政令指定都市への移行にともない、クラブ名称を現在の「さいたま新都心ロータリークラブ」に変更。現在40名の会員で「新しい時代のロータリー」を模索しながら活動を進めております。

今回クラブ創立20周年を記念して、講談「日本のロータリーの創始者 米山梅吉翁一代記」のDVDを製作しました。

もともとこの講談は、今から10年前、当クラブの創立10周年記念講演として、我がクラブが新たに脚本を起こし、6代目宝井馬琴氏にお願いして発表した本邦初の新作講談です。その後、全国のロータリークラブからその時に収録したビデオを例会で使いたいという問合せがあり、実費でお送りしていたのですが、収録時間が長いためクラブの例会には活用しづらいものでした。

そこで、20周年を迎えるにあたり、新たに脚本も見直して静岡県の米山梅吉記念館で再度講



演していただき、例会で使用できるように時間を短縮してDVDにしました。また、講談だけでなく、米山梅吉記念館や梅吉翁が眠る墓所の様子も収録して、10月の米山月間などにご利用頂けるような内容に致しました。

演者の6代目宝井馬琴師匠は静岡県の出身ですが、我がクラブの初代会長である鶴田久仁彦氏が主催する「宝井馬琴壇玉を語る夕べ」では、地元埼玉の偉人を扱った新作講談を毎年発表されており今年で第60回を迎えます。

そのように馬琴師匠と我がクラブとは長いお付き合いもあり、今回のDVD製作にも喜んで協力していただきました。

このDVDにつきましては、製作に当たっていろいろとご協力賜りました米山梅吉記念館に寄贈し、来館されるロータリアンの皆様に実費で頒布させていただくことにしました。また、その収益金については米山梅吉記念館の事業にご利用いただければと考えております。

素人の手作りですので不備な点が多くあろうかと存じますが、ロータリーの友情に免じてご容赦賜りたくお順い申し上げます。最後にこのDVD製作に当たってご協力いただきました米山記念館の皆様、そして近隣クラブのロータリアンの皆様に心から御礼を申し上げます。

ご寄付のお願い

記念館の運営を支える大きな力は、全国一人100円募金運動です。昨年度の集計は下表の通りです。今後とも皆様のご理解、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

振込先 (100円募金)事業資金振込先
郵便振替口座 番号 00820-4-57730 財団法人 米山梅吉記念館

地区	地区名	RC数	口数	金額	地区	地区名	RC数	口数	金額
2500	北海道東部	66	4	11,500	2670	愛媛・香川・徳島・高知	74	7	38,900
2510	北海道西部	73	11	65,900	2680	兵庫	74	13	53,500
2520	岩手・宮城	84	10	27,900	2690	福島・鳥取・島根	67	18	87,500
2530	福島	67	9	508,000	2700	福岡・佐賀・長崎	59	4	26,000
2540	秋田	42	7	29,500	2710	広島・山口	74	51	301,100
2550	栃木	50	3	8,200	2720	熊本・大分	76	8	36,000
2560	新潟	57	6	23,554	2730	鹿児島・宮崎	64	4	15,100
2570	埼玉西北	54	12	41,900	2740	長崎・佐賀	57	4	11,900
2580	東京・神奈川	70	17	96,200	2750	東京・北マリアナ諸島・グアム・ミクロネシア	91	41	239,990
2590	神奈川	62	27	147,178	2760	愛知	82	15	77,000
2600	長野	57	8	33,000	2770	埼玉南東	81	15	63,700
2610	富山・石川	66	3	9,548	2780	神奈川	68	10	28,100
2620	静岡・山梨	80	28	135,703	2790	千葉	83	25	137,674
2630	岐阜・三重	80	14	63,200	2800	山形	53	4	17,180
2640	大阪府南部・和歌山	72	5	145,600	2820	茨城	60	6	52,500
2650	福井・滋賀・京都・奈良	96	10	45,800	2830	青森	40	10	166,800
2660	大阪府北部	85	10	55,746	2840	群馬	47	6	25,800
RC総数 2,311				口数 385 口	合計金額 2,826,173 円				

ながいづみルート探検! ふるさと大発見

平成22年7月31日、ながいづみ観光交流協会主催で「ながいづみルート探検! ふるさと大発見」というイベントが行われ、応募のあった小学生から大人まで、約20名の方が参加しました。

5回目のテーマは、「米山梅吉や上土狩にまつわる歴史を巡る」。参加者は、皆さん長泉在住の方々でしたが、意外にも記念館は初めて、という方が多いこ



とは至極残念。選舉の投票所にもなっている記念館ですが、普段、足を踏み入れるのは敷居が高いのか? 記念館の反省点もあります。記念館で一通り梅吉の足跡を辿ったあと、新装開店の米山文庫へ。往時の米山文庫を知る方々が感激していた姿に、当方も感激。

昼食を食べ、英気を養った後は、文化財展示館の廣瀬高文さんの説明により、上土狩地区の歴史をビデオで予習。そしていざ現場へ。皆さん熱心に上土狩の水にまつわる場所を見てまわりました。

小川会長の言う「口コミから街口コミ、そしてマスコミへ」という地域力は、まずは地元を知ることから。皆さんも身近な歴史探検に出かけてみてはいかがですか?

米山梅吉記念館周辺の観光情報



都会の喧騒から離れ
静かにたたずむ老舗の宿で
贅沢な時間を
お楽しみ下さい。



米山梅吉記念館から一番近い温泉宿
はなぶさ

〒430-2211 静岡県伊豆の国市長崎11-4-1
TEL (055) 948-1230 FAX (055) 947-1718
URL <http://www.yanmarutaraonsen.com/>

●お車込み・お問い合わせは
ロータリーとお電話下さい。

米山梅吉記念館のご案内

開館時間

午前10時～午後5時（但し11月～3月は
午後4時まで）

休館日

- 月曜日
- 12月28日～1月4日
- 整理のための休館日
(5月・8月の特定日)



米山梅吉記念館 館報

Vol. 16

発行日 平成22年8月10日
発行者 財団法人 米山梅吉記念館 理事長 渡邊脩助
〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1
TEL (055) 986-2946 FAX (055) 989-5101
URL <http://yoneyama-umekichi.jp/>
e-mail: yumh@ai.tnc.ne.jp
印刷 フタバ印刷株式会社